

南西諸島の自衛隊増強

“沖縄盾に” 日日本軍と同じ

「沖縄を盾にしていよいよ自衛隊は旧日本軍と体質は変わっていない。しかも今は敵基地攻撃能力の保有で盾アラス系の体制。余計に危険だ」。明治大の山田朗教授（日本近現代史・軍事史）はじり警鐘を鳴らします。「国体（天皇絶対の体制）護持」と本土決戦を運らせるための「捨て石」として多くの尊い人命を奪った沖縄戦と、南西諸島各地で自衛隊のミサイル部隊配備が強行され、敵基地攻撃能力保有を決めた安保法文書の具体化が進む現在。78年前の沖縄戦で命を奪われた二十数万人を追悼する「慰霊の日」（23日）を前に、恐るべき“共通性”を考えます。（小林司）

日本軍の最高統帥機関であつて劣勢となつた1943年、「本大本當は太平洋戦争の戦況が、十防衛」と戦争継続に不可欠な



「絶対国防圈」を設定。南西諸島では航空中継基地として飛行場の拡張整備や新設などを開始し、44年3月22日には沖縄に南西諸島を作戦範囲とした陸軍第32軍を設置しました。

「絶対国防圈」を設定。南西諸島では航空中継基地として飛行場の拡張整備や新設などを開始し、44年3月22日には沖縄に南西諸島を作戦範囲とした陸軍第32軍を設置しました。
想定。山田教授は、「上陸していく米軍を沖縄に長時間拘束し、九州・沖縄・台湾の三方から包囲して航空攻撃で打撃を与える」と想定していた」と解説します。

第32軍は県内各地から住民を徴用し、小学生までも勤労奉仕をやるなど根こそぎ動員で飛行場の建設を急ぎ、南西諸島を「不沈空母」「航空要塞」化しました。

(3面) (3面)

